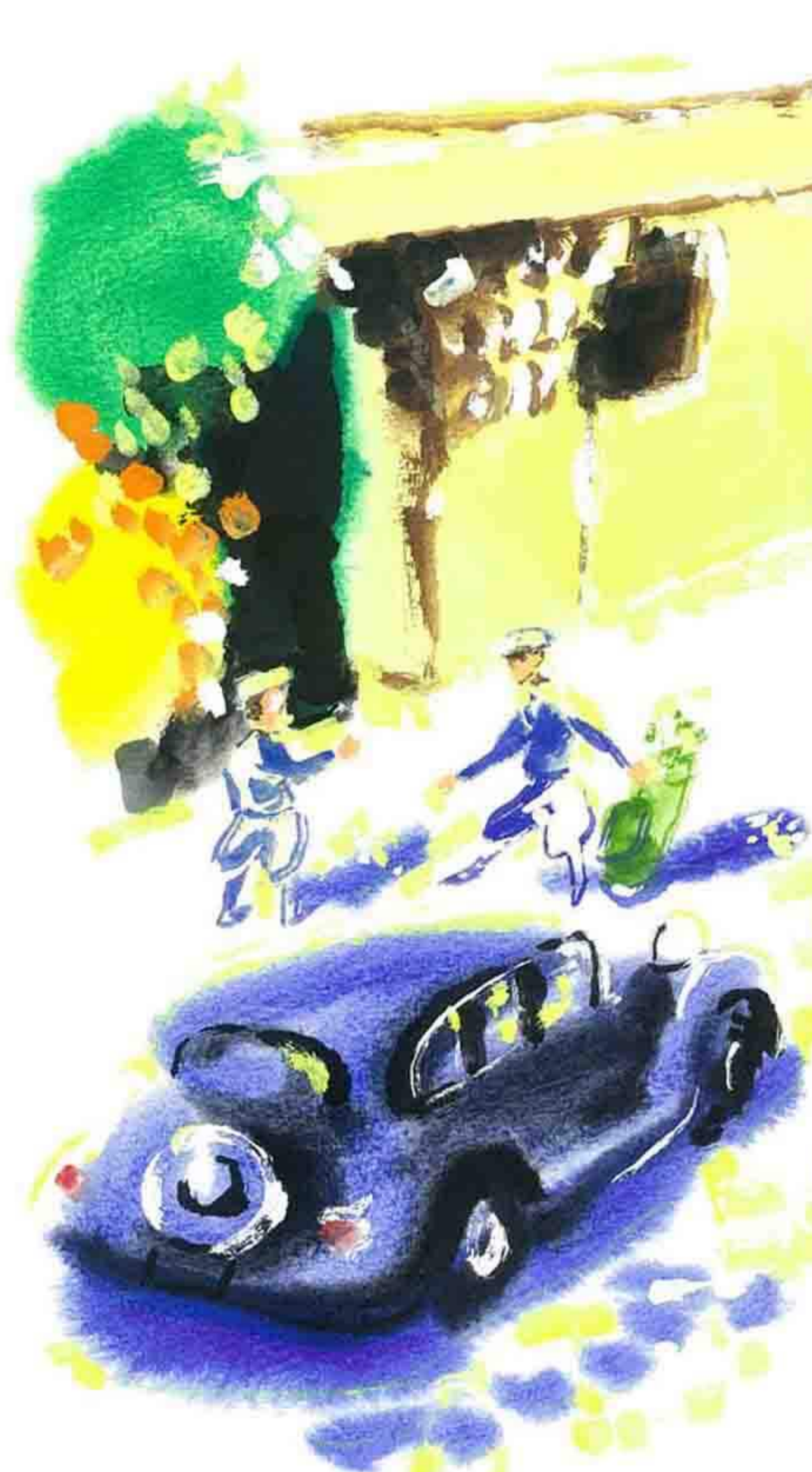


# “伝統はあるが、古くはない” 90周年を迎えた関西の名門

宝塚ゴルフ倶楽部

小関洋一=文 早乙女道春=画

日本を代表する歴史ある倶楽部で、人気コースを擁する宝塚GC。  
「阪神間モダニズム」から誕生した社交倶楽部をルーツに、  
当時では珍しく外国人居留者に頼まず、また富裕階級だけではなく  
広くゴルフの文化を根付かせようと活動した、  
モダンで温かな倶楽部の歴史をたどる。



旧コース8番ホールは178Yのパー3。グリーン手前が急な下り斜面で、正確な距離感のショットが求められる

射的場といったレジャー設備もあった。  
そこに、当時愛好者が増えつつあったゴルフの施設も造ろうということになり、同年10月2日、近くを流れる逆瀬川上流の高台に3ホールのゴルフ場が誕生した。  
これが宝塚GCの始まりである。

富裕階級だけの  
ものではないと  
入会金は破格の安さに

設計を担当したのは、日本人初のプロゴルファーとして知られる福井寛治。いまでも旧コース1番ホールのフェアウェイ右側に「甘香塚」と記された塚があるが、そこが当時の1番ティで、元はミカン畑だったことからその名が刻まれている。

「宝塚倶楽部ゴルフ部」の入会金は30円（年会費12円）。やはり会員を募集していた大阪の茨木CCは500円だったから、破格の安さである。そこには「ゴルフは富裕階級だけのものではなく、誰もが楽しめる倶楽部にしたい」という思いがあった。

すると、願いどおり会員数はたちまち300人を突破。そのために3ホールでは収容できなくなり、間もなく6ホールに拡張。さらに、翌27年（昭和2年）10月には3ホールが追加され、9ホールのコースが完成する。拡張の6ホールを設計したのは茨木CCの創立メンバーのひとり、広岡久右衛門だった。広岡は若い頃、銀行や保険の研究研修のためにヨーロッパに渡り、そこで本物のゴルフに触れていた。そして、25年（大正14年）

「阪神間モダニズム」——1900〜30年代、和暦では明治30年代、昭和10年前後、大阪・神戸間の六甲山系を背景とする地域に生まれた近代的な芸術・文化・ライフスタイルであり、革新的な西洋の文化を取り入れながらこの地域の発展を進めた文化的精神のことである。その阪神間モダニズムの象徴的な存在に宝塚ホテルがある。

阪急東宝グループの創業者・小林一三が阪急を辞めた南喜三郎に「宝塚の川の向こう側（武庫川の西岸）を開発してみないか。一流観光地にふさわしいホテルを造ったらどうだ」と提案したことから、26年（大正15年）5月14日、宝塚南口駅前に開業した5階建ての洋館ホテルである。

同年8月7日、その最上階に阪急の重役であった上田寧が提唱した社交倶楽部「宝塚倶楽部」が設立された。阪神間に住む名士たちの社交場で、屋外にはテニスコートや弓道場、

に大阪初のゴルフ場である茨木CCを設立、その造成にも携わった。一方、宝塚では初代キャプテンに就任。関西に活気あふれるゴルフの文化を根付かせようと、富裕層だけでなく、広く普及に務めた。

その結果、会員数は徐々に増えた。そこで28年4月に宝塚倶楽部から独立。「宝塚カンツリー倶楽部」と改称し、新たなスタートが切られた（戦後間もなく、宝塚ゴルフ倶楽部と再改称）。翌年2月、広岡はコースを全面改造。新しい9ホールを完成させるが、日曜・

祝日ともなればコースは超満員になった。そのため広岡は阪急の総帥・小林からこんなことを言われた。

「宝塚はゴルフコースじゃない、練習場だ。あのようなものを大ゲサに宣伝して会員を募集するのはペテンだ」と云っている者がいるが、その通りかネ。それから、阪急が関係しているからには、もっと立派なものを造れと悪口を云っていたが、癪にさわるから、ソコラの倶楽部に負けないものを造ったらどうかネ」

そのうえで小林は、土地の無償賃貸や建設資金の立替えなど、有形無形の援助を申し出た。ちなみに、小林個人はゴルフにまったく関心がなかった。こうして宝塚は30年（昭和5年）10月に、やはり広岡の設計で9ホールを増設。18ホールのコースが完成する。同コースは、折しも廣野GC設計のために関西を訪ねていたチャールズ・H・アリソンの視察と助言を仰ぎ、それに従って手が加えられたと言われる。

しかし、そのコースも戦中・戦後の激動に大きく姿を変えた。戦中は、一部は買収、一部は海軍に徴用され、戦後は全ホールがアメリカ進駐軍に接収される。接収中の47年（昭和22年）には進駐軍によってアウト9ホールの復旧が求められ、その結果、大谷光明の設計で現在の旧コースが誕生する。

大谷は日本ゴルフ協会創立の中心人物で、「日本のゴルフの父」とも、「ゴルフルールの神様」とも呼ばれるゴルフ界の大先輩だが、晩年はこの宝塚GCを愛し、近くに居を移し、足しげく通った。その後、59年（昭和34年）には大橋剛吉の設計で新コースの18ホールが造成され、宝塚GCは西日本で最初の36ホールを擁する倶楽部となった。

ご存じのように宝塚GCは関西でも屈指の人気コースである。コースは広々とした丘陵地に造られ、もともとの大地が持つ起伏が巧みに生かされている。そのため、まるで大昔からそこに広がっていたかのように、自然と調和した美しい景観が広がる。また、距離は長くはないが、関西オープンなどツアーイベントの舞台にもなる高い戦略性も魅力と言われる。

### 誰もが気持ち良く 過ごせる倶楽部に

宝塚GCには「新しもん好き」という気風が脈々と受け継がれている。倶楽部の80年史には「伝統はあるが、古くはない。宝塚の歴史は、進取の歴史でもある」といった言葉が並ぶ。実際、倶楽部の歴史をたどると、それまでの常識にとらわれない、斬新な制度や仕組みがいくつも見られる。

例えば、「家族会員制度」。正式会員でなくてもその家族であればプレーできる制度は、いまでこそ珍しくないが、これも宝塚GCが戦前に逸早く設けたものである。しかも、単に来場者を増やすことが目的ではない。

「いい倶楽部は、コースが第一であるが、その次に会員が立派であること。もう一つはいいプレーヤー、強いプレーヤーを生むことが大事」というコンセプトから、37年（昭和12年）に「双葉会」という、若いプレーヤーが技術の研鑽と心の鍛錬に努める研修会が生まれた。そこに正式会員の子弟も加われるようにと設けられたもので、つまりは「いいプレーヤー、強いプレーヤー」を育てる機会を広げたいとの考えから誕生した制度である。

こうした取り組みは戦後もなく大きく開花する。54年（昭和29年）の関西女子ゴルフ選手権優勝を皮切りに、関西ゴルフ連盟主催の公式戦で宝塚GCはいくつものタイトルを獲得した。また、日本アマを2度制し（58年、61年）、世界アマチニアチーム選手権に日本代表として出場した石本喜義も家族会員

寄せている。

人望の厚い島田は後年、日本プロゴルフツアー機構の初代会長に就任する。

島田同様、宝塚GCの魅力が「家族的な雰囲気」と口にする会員は多い。

「誰もが気持ち良く過ごせる倶楽部に。こうした思いもまた、伝えたい宝塚の心です——同じく80年史に大きく謳われている倶楽部のモットーだ。

例えば、宝塚GCは戦前から多くの女性会員を擁し、レディス競技を積極的に実施している。ここからは日本女子アマ4連覇の泉谷珠子という偉大な女性ゴルファーが育った。また、18ホールをプレーするのがきつくなつた高齢会員にも競技を楽しんでもらいたいとの思いから、満80歳（女性は70歳）以上を対象にした9ホールの倶楽部競技を発売。当初は理事会で「ゴルフの基本は18ホール」と反対されたが、「どんなに高齢になってもプレーヤーが楽しめ、それをまた若い会員たちが温かく見守る。それが宝塚GCのあるべき姿ではないか」との声に皆が賛同。「宝塚会」という準倶楽部競技が創設された。

「新しもん好き」の気風はゴルフ場運営にも及んでいる。もともと関西では維持管理が難しいと言われるベントグリーンの採用に、西日本で最初に挑んだのも、この旺盛な進取の精神のなせるわざに違いない。

宝塚GCには、日本のゴルフ発祥の地、神戸に近い土地柄、たまたま古い歴史を持った倶楽部というイメージがあった。しかし、深く知るほどに、前記「伝統はあるが、古くはない。宝塚の歴史は、進取の歴史でもある」という言葉に嘘のない内実が見えてくる。



池と松が美しい新コースの4番ホール（489Y、パー5）。大胆にティショットを打っていきいたい名物ホールだ